

総合教育研究センター
学生向け情報誌

クレードル

第8号

Center for Research And Development of Liberal arts Education
8th issue

CRADLE

8月の川上村は熱かった



自分で考えて行動する実習「森に生きる」は学年も学科もちがう学生が共同生活をする授業。吉野での森林伐採、川遊び、河原でのお弁当、スイカ割り、薪割り、かまどで炊くご飯、そうめん流し、BBQ、満天の星空観察・・・古民家での4泊5日はあっという間。報告は次ページ以降に。
(伊藤) (2ページに続く)

こころの健康法5

ゆっくり時間をかけましょう。

現代はスピード化の時代です。パソコンやスマートフォンは、あっという間に次世代のものに進化しますし、インターネットの高速通信で、世界発の多量な情報がどんどん飛び交って、すぐに最新のものに更新されていきます。いろいろな商品も、今日頼めば明日届く(即日届くものもあつたりします)というのが当たり前のようになってきています。今という時代は、とても豊かで便利な、かつてない生きやすい時代であるといえるでしょう。(仲)

(8ページに続く)

向日葵と雨傘と盾 —台湾、香港、日本—

2014年3月～4月、台湾の「ひまわり学生運動」は、台湾の民主化運動の系譜に位置づくものとして、台湾の「歴史」に刻み込まれました。2014年9月～12月、香港の「雨傘革命」は、「中国」と対峙する「香港」という構図を、地下水脈として^{とうとう}流れる民主化の意思の上に再現しました。(山本)

(6ページに続く)



ドイツ日本学大会 参加報告記

今年の夏(8月26日から28日)に、ドイツ南部のバイエルン州ミュンヘン大学で開催された「ドイツ日本学大会」に参加してきた。8月17日にドイツ入りをしてケルン、ベルリン、マールブルク等を訪問して資料収集・旅行をした。その一環の重要なイベントが、この大会への参加であった。ドイツに着いた日(8月17日)は、雨で肌寒かったが、その後暑い日が続いた。ミュヘンもこの時期としては例年よりかなり暑く最高気温33度から34度を記録していた。(浅川) (7ページに続く)

8月の川上村は熱かった

—毎日ひとりひとこと、ふたこと—

(学生の日誌より：構成 伊藤義之)

8月6日

西田 悠



初めての森に生きるの参加だったので、どうなるかと不安と楽しみが半分半分でした。かまどで火を焚いてのご飯、二層式洗濯機、木を切る体験、満天の星空に地元とは違う涼しい気温など、初めてづくしでとても楽しかったです。

野田 沙良



「森に生きる」の参加は2回目であり、参加者もリピーターや顔なじみの人が多かったので、そこまで緊張せずに初日を過ごすことが出来ました。だいたいの実習の流れも分かっていたので昨年よりかは周りを見て自分から行動できたかなと思います。薪で沸かしたお風呂、とても気持ちよかったです。

岩崎 智浩



私は今回初めて「森に生きる」に参加させていただきました。実際にはオーストラリア版の「森に生きる」に参加したことがあるのですが、内容は異なるものです。また、このオーストラリア版の「森に生きる」に参加して楽しかったのが今回川上村の方に参加したきっかけとなりました。

吉澤 正



初日は最初からみんなに迷惑をかけました。朝の出発も遅れ、着いたらついで、友達が車のタイヤを溝にはめてしまい、みんなに手伝ってもらってようやく抜けました。本当に皆さんに迷惑をかけた一日でした。

趙 明圓



到着後、午後3時ごろ、みんなで山の神に参った。森に入って木を切ってから家に帰って、夕食を作った。杉本先生の指導で、みんな、仕事を分けて、野菜、肉を切るメンバー、ご飯を炊くメンバー、楽しくカレーライスを作りあげた。カレーライスの美味しい作り方を初めて勉強になった。

菅野 紗矢香



就活のため夕方からの参加となり、みんなと準備ができませんでした。ですが、途中からでもみんなの輪の中に入ることができてよかったです。昨年に続き、2回目の参加なので前回の経験を生かして、今年の「森に生きる」の作業に積極的に参加していきたいと思います。

8月7日

西田 悠



朝から5本ほどの木を切りました。切っていい木と危ない木があること、他の木にロープをつなげ、切り倒す位置を決めることなどを学びました。切った木をさらに切る時のポイントや木の重さの違い(水分を含んでいるか含んでいないか)なども学ぶことができ、とてもいい経験になりました。

野田 沙良



湿気があり、朝からかまどで火をおこすのは大変でしたが、その分火がついたときの喜びはとても大きかったです。遊歩道のはしごの修繕を行いました。のこぎりで丸太を切るのは大変で、足場は悪いし、腕も痛いし、汗もたくさんかくしで、途中で投げ出したくもなりましたが諦めずに自分一人の力で丸太が切れたとき、心の中は達成感でいっぱいになりました。



岩崎 智浩

山にはヒルなどの虫もいるので長袖長ズボンという夏には似つかわしくない恰好で入りましたが、山の中は木が陰を作っていて近くに川があることもあってか予想していたよりも暑くはありませんでした。初めて木を切るという作業を体験し1本切るだけでもとても体力を使う作業だなと実感しました。



吉澤 正

朝起きてみんなで手分けして薪を割ったり、朝ご飯とお昼のおかずを作ったりしました。1年ぶりの山は思っていたより荒れていました。こんなに歩きづらかったかなって思いながら、遊歩道を登って木を伐りました。



趙 明圓

食後、森の作業でみんなが木を切るグループと山道作りのグループの2つのグループに分かれ、暑い天気に耐えて頑張った。午前の作業が終わってから、みんなで川沿いで、昼食を食べた。が、川に入った正君はかわいそうに蛭に咬まれた。



菅野 紗矢香

山の中にいると木の大きさを実感でき、普段は感じる事ができない鳥・虫・川の音など「自然の力」といったものを感じました。「森に生きる」の生活の面ではあまり苦労はなかったのですが、作業のほうはなかなか難しく、木を切るときの斧の入れ方は力が入らず大変でした。

8月8日



西田 悠

この日は途中で雷が鳴って中止になるなど、あまり作業できませんでした。しかし遊歩道作りや薪割りを自分たちでして、ノコギリやクワなどの使い方を学んで少し使いこなせるようになったのがとても嬉しかったです。

「森に生きる」2015年度実施概要

- 期 日：2015年8月6日（木）～8月10日（月）
- 場 所：奈良県吉野郡川上村伯母谷地区「天理大学 用木の森」
- 受講学生：6名（卒業生は除く）

人間学部人間関係学科生涯教育専攻 2年	にしだ ほるか 西田 悠
国際学部外国語学科英米語専攻 3年	いわさき ともひろ 岩崎 智浩
国際学部地域文化学科アジア・オセアニア研究コース 3年	よしざわ ただし 吉澤 正
人間学部人間関係学科生涯教育専攻 4年	すがの さやか 菅野 紗矢香
人間学部人間関係学科生涯教育専攻 4年	のだ さら 野田 沙良
国際学部外国語学科日本語専攻 4年	ちよう めいえん 趙 明圓
- 引率教員：伊藤義之、仲淳、池田華子（総合教育研究センター）
- 事前研修：(1)5月11日（月） 「科目の趣旨や概要、受講に関する注意点の説明」（伊藤義之）
 (2)6月8日（月） 「森林の働きについて」（講師 奈良県農林部森林整備課 福西一慶氏）
 (3)7月13日（月） 「吉野の林業一般および実際の作業や村の伝統的生活について」（講師 作業指導員 水本茂氏）



野田 沙良

今日は人生で初めてヒルに噛まれました。昨年是一回もヒルに噛まれなかったし、水にも浸かりにいかなかったのが大丈夫だろうと高を括っていました。でも一応噛まれないように気をつけてはいたのでヒルが足についているのを見たときは残念な気持ちでいっぱいになりました。



岩崎 智浩

天気にも恵まれ森での活動を行うことができました。夜に街灯の少ない場所に行くともとても綺麗な星空を見ることができました。そこで人生初の流れ星も見ることができてとても満足しています。



吉澤 正

午前の作業を終えて、水着に着替えようと靴を脱ぐとなんと！！足が血だらけ、ヒルに初めてやられました。しかも左足に2か所。ずっと血が止まらなくて、ちょっとビビりました。かえってお風呂の火番して、ご飯食べて生まれて初めて流れ星を見ました。お願いする暇なんてないです！！速すぎる！！



趙 明圓

山に上って、木を切るチームや山道作りチームのビデオを撮りながら、初めて鋸と斧で木を切ってみました。作業後初めて、薪割りをした。どちらも体験してみて本当に良かった。夕食後、日誌を書こうと思ったけど、伊藤先生としゃべり始めたら止まらない。いろいろ以前のことを思い出した。



菅野 紗矢香

本日は指導員の泉谷さんが、水本さんが教えてくれた木の倒し方とは少し違った方法を教えてくれました。それは、倒したい木よりも大きな木にロープをくくりつけ、倒すときにそのロープにぶら下がって体重をかけることで倒すという方法で、万が一引く力が抜けても太い木に結び付けてあると思うと、安心して作業することができました。夕飯はナシゴレンが並び、食べたことがなかった料理でしたがとても美味しかったです。盛り付けも先生方、学生の皆で考えながら行えたので楽しく作業できました。

8月9日



西田 悠

この日も遊歩道作りをしました。お昼はスイカ割りをしたり、川の魚を捕まえたりと、昨日同様夏を満喫しました。夜は美味しいお肉でBBQをしてとても楽しかったです。入ってすぐの遊歩道の補強が中途半端なところで終わってしまったことが心残りです。



野田 沙良

今日はプレート付近の草刈りをしました。たくさん草が生えていた場所が徐々にさっぱりしていき、わたしの気持ちもさっぱりしました。なんと、2回目のヒル被害にあいました。今日こそはヒルに噛まれまいと完全防備をしていたのに噛まれたので悔しかったです。昨年台風のため出来なくて歯を噛んだ、念願のBBQを遂にすることが出来ました！あと一日で実習が終わってしまうのは寂しいと思いました。



岩崎 智浩

今日も天気にも恵まれ森での活動を行うことができました。森林作業以外にも流しそうめんやBBQ、スイカ割りなどもして楽しく時間を過ごすことができました。



吉澤 正

午前の作業は山組と雑草刈り組に分かれて作業をしました。写真を撮るために雑草組のところに行ったらいつの間にか寝ちゃってました。起きて山を下って木を伐る組と合流してお昼食に下山。夕飯は去年出来なかった待ちに待ったBBQ!!いっぱい肉食べてビール飲んでたらいつの間にか寝てしまっていました。



趙 明圓

今日も森で作業をした。みんな、大分上手になってきた。作業後、川沿いで昼食を食べ、仲先生と魚を取って遊んだ。食後にスイカ割りゲームをした。帰宅後、屋根のペンキ塗りをしてみた。人生初めてのペンキ仕事も楽しかった。BBQでは最初肉ばかり食べて、すぐお腹いっぱいになった。食後、後ろの山で星を見た。本当に大満足の日だった。(笑)



菅野 紗矢香

今日は歴代の「森に生きる」のメンバープレート前の草刈りを行いました。その場所に行くのは初めてだったので、今まで参加してきた天理大学生の名前を見てこの取り組みがここまで続いてきたことを感じ、これからも続いていってほしいと思いました。BBQの焼く場所が地面であったことに驚きました。地面でする場合は、まず火をおこし雑草をもやして、炭をいれて焼くらしく、今は便利な道具が周りにあふれているけれど、こうして山の中で暮らすなりのさまざまな工夫があるのだと感じました。

8月10日



西田 悠

全体を通して、実りある実習になりました。現地に行かないと分からない現実や木の知識、道具の使い方が学べてとてもよかったです。学生が6人、うち初心者が2人という中ではありましたが、だからこそそのアットホーム感を感じることができ、親戚の集まりのようだと思うほどでした。



野田 沙良

今回は5日間とも無事に迎えられ、今日は念願の流しそうめんもすることができました。流しそうめんをすくうのも流すのも楽しかったです。今回2回目の参加ということで今自分は何をするべきか、周りを見て今何をしたい方がいいのかなど昨年よりは考えて行動出来たかなと思います。10月に行う木の工作教室で森林問題などこの実習で学んだこと・体験したことをわかりやすく子ども達に伝えたいと思いました。



岩崎 智浩

最終日は、森での作業は行わず「森と水の源流館」に行きました。ここは森に生息している生き物を展示したりしている博物館のような場所です。源流館をあとにし天理大学に到着した後、色々な使用した用具を片付けて解散となりました。



吉澤 正

宿舎の掃除をして布団を運んで荷物を車に乗せて出発!!「森と水の源流館」で鳥と動物の鳴き声とか雨の音とか最初は真剣に聞いていたんですが、いつの間にか爆睡してました。去年は台風で後半が潰れましたが、今年は全日程を終えることが出来てよかったです。事前研修のときはたくさんいた人数も減って結局学生は6人。でも本当に楽しい5日間でした。



趙 明圓

今朝、初めて流しそうめんを食べた。今回はいろいろ初めて体験したことがあり、本当によかった。食後、みんなで帰る準備をした。食後みんなで看板のところで写真を撮った後、施設見学をし、みんなバスに乗って天理に帰った。正直、あまり天理に帰りたくなかった。今回、料理の作り方でも、作業でも、みんなと遊びながらもいろいろ勉強できて、楽しかった。来年もし時間があれば、また参加したい。



菅野 紗矢香

今日で最終日となりました。片付け作業からはじまり、最後は施設見学で終了しました。あっという間の5日間、天気にも恵まれとても良い経験ができたと感じています。山の中の民家でする共同生活はいろいろ自分なりに考えて行動しなければならぬ場面は多々ありましたが、楽しい時間でした。林業体験だけでなく、この共同生活も「森に生きる」の楽しみのひとつだと思います。普段話さない違う学科、学年の人、また先生方や指導者の方々とじっくり話せる機会は貴重で、自分を振り返る良い機会だったと思います。

「向日葵」と「雨傘」と「盾」

—台湾、香港、日本—

(1 ページからの続き)

台湾と香港の学生運動については、『CRADLE』第5号(2014年4月)と第6号(2014年10月)で文章をまとめました。特に、第5号では、台湾の学生運動について以下のように書きました。「学生運動」が「歴史的事件」となってしまった日本の場合と、「学生運動」の「伝統」が現代社会のなかにも息づいている台湾の場合とでは、「学生運動」の果たす役割は大きく異なるのではないのでしょうか。大きな違いは、「学生運動」に対する社会的包容力が現代にあってもなお大きいという点にあるように思います」。

台湾の学生運動が続いていた最中に書いたこの見立ては、基本的には間違っていないと思います。でも、この18か月のあいだに、日本ではすでに過去のこととして忘れ去られていたと思っていた学生運動の「伝統」が、まったく新しい形で登場してくると思ってもみませんでした。その見通しの甘さについては認めざるを得ません。

2015年8月30日、「安全保障関連法案」に反対するデモが国会前でおこなわれました。10万人以上が集まったというデモの様子は、新聞紙上やテレビニュース、ネットによって多くの人々の目に触れ、今回の法案に対する関心が一気に高まってきました。国会前の道路が人で埋め尽くされるという光景は、特に「60年・70年安保闘争」と呼ばれる「歴史的事件」をタイムリーに経験していない30代以下の人々にとっては、はじめて目の当たりにする光景でした。また、「国会前」に呼応する形で、全国各地で連日、多様な「安保法案反対」のデモが開催されていたことは、多くの人々の日常に隣り合わせる形で、あるいは日常のなかで、デモがおこなわれていることを実感させました。

この18か月のあいだに台湾・香港・日本でおこった大規模なデモは、すべて学生が大きく声をあげ、支持を広げ、あらゆる世代の人々が集っていくという形で拡大していきました。日本では、この文章を読んでいるみなさんと同じ、大学生を中心とした学生団体である「SEALDs(シールズ: Students Emergency Action for Liberal Democracy-s/自由と民主主義のための学生緊急行動)」が大きな役割を担いました。

SEALDsは、「SASPL(サスプル: Students Against Secret Protection Law/特定秘密保護法に反対する学生有志の会)」という、2013年12月に成立した「特定秘密保護法」に反対・抗議する団体を前身としています。SASPLもSEALDsも、ともに「特定秘密保護法」や「安保関連法案」という個別の法案に反対するという目的をもっていました。しかし、SEALDsの正式名の中に「for Liberal Democracy/自由と民主主義のため」という文言が入っているように、個別の法案への抗議ということを超えて、「自由と民主主義」という「国のありかた」にかかわる運動へと広がります。

SEALDsの中心メンバーのひとりである奥田愛基さんは、運動の広がりをこのように述べています。「僕らが本気でやっているのを見て、学者の人たちも態度を変えたし、言い訳をすることをやめた(…)いろいろな人たちが、日本中で、何の留保もなしにあるべき立憲主義や民主主義について語るようになったはずです(…)今起こっていることは、安保法案を止めるということだけには収まらない。もっと大きなものが生まれているはずです」(「勇気、あるいは賭けとして」、『現代思想』第43巻第14号、2015年9月、51頁)。

台湾の「ひまわり学生運動」は、占拠した立法院からの「自主的撤退」を余儀なくされましたが、彼らが示した政権与党への抗議の声は、半年後の2014年11月におこなわれた地方統一選挙における与党国民党の大敗につながったといわれています。香港の「雨傘革命」は、「自主的撤退」ではなく「強制排除」されましたが、抗議の対象となった選挙制度改革案は、立法会において可決に必要な3分の2の賛成を集められず否決され、白紙に戻りました。日本では、2015年9月19日に「安保関連法案」は与党の賛成多数により可決されましたが、今後はどうなっていくでしょうか。

台湾の「向日葵」、香港の「雨傘」。そして、日本のSEALDsが掲げた「盾」は、特定の人々だけ、立法院、立法会、国会の前に集った人々だけが手にした「武器」ではありません。それらは、世代を超えて、多くの人々ひとりひとりが、自分たちの「国のありかた」を考えるために手に入れた「希望の象徴」だと思います。

「いろいろな人たちが、日本中で、何の留保もなしにあるべき立憲主義や民主主義について語るようになったはずです」というときの「いろいろな人たち」とは、みなさんひとりひとりも含めた、日本に住むすべての人々のことを指しています。来年夏の参議院議員選挙から選挙権が「18歳以上」に引き下げられ、大学生であるみなさんは全員、選挙権を持つこととなります。日常のなかで「立憲主義や民主主義について語る」ことの大切さを、今回のさまざまな動きから学び、忘れずに実践していく人が増えればと願っています。

(総合教育研究センター教職課程 山本 和行)

ドイツ日本学大会参加報告記

(1 ページからの続き)

ドイツ日本学大会（正式には「ドイツ語話者の日本学大会」(Deutschsprachiger Japanologentag) は、ドイツ語圏で日本学を研究する研究者・学者の「学会」の「研究大会」である。今年で、16 回目を迎えた大会であった。300 人以上のドイツ語圏研究者および日本人研究者が参加していた（今年の日本人参加者は少なく数十名ほどであったと後から聞いた）。大会に招待された主な日本人には、ドイツ現代思想の権威である三島憲一氏（長年阪大で教鞭を取られていて 90 年代に天理大学にも集中講義で来られたことがある）、ドイツ在住でドイツ語と日本語で小説等を執筆している多和田葉子氏がいた。

8 月 26 日は、開会式があり、午後からいくつかのセクションに分かれて分科会が行われた。ぼくは、法セクション (Sektion Recht) に参加した。共通テーマは、「主観的権利 (権利論)」であり、さまざまな法分野から「権利論」と絡めて日本の法律問題を扱う報告内容であった。報告 20 分、質疑 10 分ときわめて短い時間内に 1 つの報告が消化されていった (すべてドイツ語使用)。途中珈琲休憩があり、フロアは、多くの参加者で大変な賑わいであった。主な他のセクションを挙げておくと、歴史、社会、外国語としてのドイツ語、文学、政治などがあった。



1 日目は、3 人 (2 人のドイツ人研究者と 1 人の日本人研究者) の報告

(ドイツ語) を聴くだけで目いっぱいであったが、つい日頃の癖 (^^) で 1 度だけ短い発言をしてしまった。たまたま自由民権運動と権利論の話で、明治時代の裁判所の事件処理のデータが説明されていた。興味深いことに、民事事件数は、年間 2000 ぐらいなのに裁判官の数は 1800 人ほどいた。この裁判官の人数は、現在とあまり変更がないことに驚いた次第である (現在は 2800 人ほどである)。しかし当然、事件数は当時より膨大になっている (民事・行政事件で 29 万件ほどである)。この点を思わず指摘してしまったのである。

1 日目の最後に、全体会で「近代化とモバイルゼーション化」というテーマでパネルディスカッションが行われた。質問が多く出て、途中で司会者が質問者を制限するほど活発な議論が行われた。終了後参加者全体で食のパーティーがあった。会場は、いわば戦場のような光景になっていたのが印象的であった ^^。

2 日目は、法セクションでは、6 名の報告が行われた。内容だけ挙げておこう。「消費者の利益維持のための契約法における公法の役割」「攻撃的な権利実現—違法な取り立てなど」「原発訴訟における個人請求権」「証券法における株主の配分価値および実現」「一時滞在の労働移民のための訴訟と労働権」「動物の主観的権利? 日本の動物保護法の発展」。この最後の報告は、ぼくのテーマとも関係があり知り合いの日本人が流暢なドイツ語で報告をした。報告者と事前に質問をする約束をしていたので、質問と簡単なコメントをドイツ語でした。

全体を通して、報告時間および質問時間が短すぎて、報告者は要点だけをまとめた報告をかなり早口で説明するしかできないという感じであった。また、質問も 2 人~3 人もしたら時間切れとなってしまった。そういう点は、かなりストレスを感じた。もちろん、ぼくのドイツ語能力では議論についていけなかったことはいうまでもないが。海外で、国際会議等で報告される本学の教員の方もいるが、その苦勞の一端を垣間見ることができる機会でもあった。そういう意味でも大変良い経験をした大会参加であった。夕方には、クラシック音楽鑑賞と詩の朗読の集いにも顔を出した。そこで、多和田葉子氏の詩の朗読 (堪能なドイツ語と日本語) に聴き入った。

3 日目は、マールブルクへ移動するため参加できなかったので三島憲一氏の講演を聴くことができず非常に残念な思いをしたのであった。

(総合教育研究センター 浅川 千尋)

こころの健康法 5

ゆっくり時間をかけましょう。

(1 ページからの続き)

ただ、そのような社会的雰囲気の中で、教育や子育ての世界などにおいても、わかりやすい、すばやい成果が求められるようになってきました。「〇歳までにしておきたいこと！」とか、「人生の□□は〇歳までに決まる！」とか。世の中、早期幼児教育はすごく盛んですし、受験競争は少子化が進んでいると言いながらもまだまだ厳しいものがあります。大学でも 4 年間で養成したい人間像などをはっきりしなければならないということが言われてきていて、企業などに就職する際にも、即戦力となる人材が求められるようになってきています。

しかし、残念ながらといいますか、当然ながらといいますか、人間というものは、そんなに簡単に思うように育っていける生きものではありません。「こう行きたい」と思っていたのに、「こっちに来てしまった」。「うまくいく」と思っていたのに「失敗した」。「順調に進んでいる」と思っていたのに、「思わぬ事故に出くわしてしまった」。そういう種々様々な想定外のことに遭遇しながら、「なんで???'という困惑や戸惑いの中で、人は少しずつ磨かれていくものなのではないでしょうか？人生、20 年やそこらでは何も決まらないのです。

筆者は、毎年参加させていた
だしている総合教育研究センター
の「森に生きる」という授業で、
7 年かけてやっとなんとなくかま
どでそれらしくごはんを炊くこと
ができるようになりました。「年
季」という言葉がありますが、や
はり年月、月日というものが、時
間をじっくりかけて人を育ててく
れるのだなあと、今年の夏に改め
て実感させられたところです。
味噌も醤油もお酒も、樽に仕込ん
でふたをして、何年もの時間をか
けることで味わい深くおいしくな
ります。そしてそのときに完全滅
菌して真空パックにするのではな
くて、いろんな菌が入ったり、樽
などに付着している雑なもの混
じること、食品は比較できない
独特の風味を獲得できるのです。学生時代とは、そういう発酵の時期のような気がします。



「桃栗 3 年、柿 8 年。梅はスイスイ 13 年、梨はゆるゆる 15 年」というそうです。どんなことでも実がなる(ちゃんとした成果が出る)には、長いたくさんの時間がかかるのです。

焦りすぎることなく、ゆっくり時間をかけていきましょう。「己は一生」です。

(総合教育研究センター教職課程 仲 淳)

CRADLE(クレードル) 第 8 号 2015 年 10 月発行

発行者 伊藤義之 天理大学 人間学部 総合教育研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050 電話・FAX 0743-63-7092 (内線) 6111

印刷 株式会社 春日